

特116

702

白鬚
盛久
佛愿
善知
小塩
无



始



特116
702



白髭 概説

内十九卷ノ一

一臣下、教により近江國白髭明神社に参りしに、湖上に舟を泛べて釣を垂る翁あり。言葉をかいて社の縁起を聞きしが、其の餘りに精しく且つ巧みに説ける様、尋常の翁にあらずるより、何人あるかを尋ねしに、眞は白髭の神なりと答へて姿を隠しぬ。やありて禰宜が打つ鼓の音も神々しき折柄、神體現れ、舞樂を奏して教使を慰め、尚天女の捧ぐる天燈、龍神の捧ぐる龍燈の湖上に輝き渡る奇瑞を見せて失せけり。

此曲終ニテ清ク確カリト誣フベシ

役別	装束	附	季	所
ワキ勅使	大臣烏帽子(赤上頭襷) 着附厚板 袴狩衣 白大口 紋附袴帯 烏扇	白大口	三	近江國淡路郡小松村白河神社
ワキツレ 從者二人	大臣烏帽子(朝黄上頭襷) 着附厚板 赤袴狩衣 白大口 紋附袴帯	赤袴狩衣 白大口	月	同上
ツレ 漁夫男	着附無地敷斗目 薄浅黄水衣 白大口(又ナシモ) 紋附袴帯 扇指シ 釣竿持	白大口(又ナシモ)	月	同上
前シテ 漁翁	面朝宮射天射ニモ 射鬘 着附小格子 茶鞋水衣 白大口(又ナシモ) 蝦子袴帯 扇指シ 釣竿持	茶鞋水衣	曲柄	管古順
後シテ 白鬘ノ神	面黒鬘射、若所是射ニモ 白垂 烏甲 白鉢巻 着附厚板 白地又茶地袴衣 半切 紋附袴帯 神扇	白垂 烏甲 白鉢巻	能	一
後ツレ 天女(眞ナシ)	面連面 天冠 黒垂 鉢巻 着附指物 長扇 緋大口 袴帯 扇 燈明持	長扇	能	一
後ツレ 龍神(誣シ)	面黒鬘 鉢巻 赤頭ニ龍ヲ戴キ 着附厚板 半切 紋附袴帯 打杖 燈明持	法杖	物	一

白鬘

観阿彌清次作

ワキ勅使 用カニ
次才上 後者
拍子合

君と祢との道直よ。君と祢との
道直よ。治る困ぞス。ま。それ
も。これ。は。當。今。う。は。使。奉。る。臣。下
なり。さ。そ。も。江。州。白。鬘。の。明。祢。は。
靈。神。み。そ。の。御。告。ま。す。に
議。の。心。靈。夢。の。御。告。ま。す。に

よりの急ぎの集宿中せとの宣旨と
 蒙り唯今白雲の响はる勅使は
 集宿はりの道行上九重の空も長閑け
 き春の色空も長閑けき春の
 色を渡る行方へ花園の志賀の
 山越うちり過ぎて真野の入江
 の道すがら鳩の浦風さえかへり

シテ射二入上
 ツノモイ
 真ノモイ
 拍子三合ハズ

立ち寄りる彼も白雲の宮右に早
 く急ぎよけり宮右は早く急ぎけり
 釣の管いつまでか隙も彼同は月け
 暮れん棹さあ延小舟渡り
 急ぬたる浮世かあ風帆を送
 る万里の程は天淵ごとく水光
 平かあり舟子の解くこれ明朝の

さぬ御事あり。も一都よりの
御事ありて。出度ゆか。げによん
てあるものかな。これの當今よは
奉る臣下あるか。君この程不思議
の山並夢の御告ますすに
勅使よ奉旨申して。有難や君
として。たよか程まで。教ひ給み御

御事

三

上上
拍子合ハ

上上
拍子合ハ

神の御光の程こそ有難けれ。
賤しき。延命のこの身も。直か
る。馬代よ。近江の湖の深き。恵みと
頼むあり。げに誰をも。忍と作
ふ。神を。教み。心あらば。あど。恵みに
預らざらん。殊更。可から
瑞垣の。奉も。經又。けり。白鷺。此の。年

白鷺

白鷺

も經^ハまけり^ハ白^ハ髮^ハの^ハ禿^ハの^ハ擗^ハひ^ハか^ハ今^ハと
 て^ハも^ハ憂^ハら^ハざ^ハり^ハけ^ハり^ハけ^ハり^ハけ^ハり^ハ有^ハ難^ハや
 頼^ハも^ハし^ハや^ハわ^ハれ^ハの^ハ心^ハも^ハ彼^ハ小^ハ舟^ハ釣^ハの
 翁^ハの^ハ身^ハあ^ハら^ハも^ハ安^ハく^ハ樂^ハむ^ハこ^ハの^ハ時^ハ
 子^ハ生^ハれ^ハあ^ハ身^ハハ^ハ有^ハ難^ハや^ハ生^ハれ^ハあ^ハ身^ハハ
 有^ハ難^ハや^ハそれ^ハの^ハ國^ハの^ハ起^ハり^ハ家^ハ々
 に^ハ傳^ハる^ハ可^ハお^ハの^ハた^ハの^ハ別^ハに^ハて^ハそ^ハの

○サニ曲独吟

説^ハま^ハち^ハま^ハち^ハあ^ハり^ハと^ハり^ハど^ハも^ハ暫^ハく
 記^ハす^ハる^ハ可^ハの^ハ一^ハ義^ハよ^ハら^ハば^ハ天^ハ地^ハ既^ハに
 分^ハつ^ハて^ハ後^ハ第^ハ九^ハの^ハ咸^ハ劫^ハ人^ハ壽^ハ二^ハ萬^ハ
 歳^ハの^ハ時^ハ。迦^ハ葉^ハ世^ハ尊^ハ西^ハ天^ハよ^ハ出^ハ世^ハ
 給^ハみ^ハ時^ハ大^ハ聖^ハ釋^ハ尊^ハそ^ハの^ハ授^ハ記^ハと^ハ得^ハ
 て^ハ都^ハ率^ハ天^ハ子^ハ位^ハし^ハ給^ハひ^ハし^ハか^ハわ^ハれ^ハ
 八^ハ相^ハ成^ハ道^ハの^ハ後^ハ遺^ハ教^ハ流^ハ布^ハの^ハ地^ハい

づれの可にありあふべきとてこの南贍
 部州と普く遊行して其後ト
 けりて。慢々とある大海の上子一切
 衆生悉有佛性如来常住無有
 變易の波の聲一葉の蘆子凝り
 固まらて一つの嶋とありあふる大宮
 掬瓊の波止去濃あり拍子合その後

人壽百歳の時悉達と生れ給ひて
 八十年の春の頃頭北面西右脇外
 拔擢の彼と清え給ふされども佛の
 常僧不憍法界の妙體あれハ昔
 蘆の葉の嶋とありし中津國と
 出衆する又時の鷓草葺不合の
 尊の身代あれハ佛法の名字と入

知らず。さるは、^{ヒトル}叔山の林麓、^ヤ彼を
 志^ガ努^ラの浦の邊、^ヤ釣^セと^キ老翁
 あり、^上釋尊^カかれ^ニ向^ツて、^ヤ翁^モも^トい
 この地^ノの主^タら^バこの山^トを^ワれ^トい
 與^ヘよ^ク佛^ノ法^ノ結^ノ界^ノの地^トあ^スべ^トい
 と宣^ヘば、翁^答へ^テ中^すわ^らう^わわ
 れ^人壽^六十^五歳^の初^{より}、^チこの山^の

主^トして、^ハこの湖^ノ七^度まで^ノ蘆^原に
 あり、^シとも^もま^まに^見たり、^翁あり
 但^しこの地^ノ結^界と^ある^なら^ば釣^ハ
 する^可失^せぬ^べと^いふ^と深^く惜^み中^ト
 せば、^釋尊^カあ^く、^今の^寂光^出る^時歸^ス
 らん^とい^はれ^ば、^時は^東方^{より}、^淨瑠^璃
 世界^の主^宰所^に出^て給^ひ

て善まゝかあや。釋尊この地は佛法
 と弘め給はん事よわれ人壽二万
 歳の昔より。この處のまはれど老
 翁未だわれと知らずあんぞこの
 山と惜みすすまらや開闢し終へ
 われもこの山のまゝあつて昔は後
 五百歳の佛法と守るべしと固く

哲約し給ひて二佛東西より終
 その時の翁も今の白髮此の神とかや
 不思議ありとよかほどもまで妙ある

神祕と誇る翁のその名は如き
 集束か今何と色むべき。その
 古も釣と垂れし翁あるか。勅使と
 慰めやさんとして唯今こそよ来りたり。

...

...

殊更コトサ今イマ宵ヨヒの天テン燈トウ籠リ燈トウ神カミ前マエよ来ライ
 現ゲンの時ジ節セツ合カあれハ暫シラく待マたせ給タマふ
 べベとト外ソトの雲クモも立タち駭カきウ夕ユフの
 雲クモも立タち駭カきウ行ユキよ落オちスくるル角ツノの
 音ネ老ロウの波ナミもモよヨりリくるル釣ツリの翁オウと見ミえ
 えエつツるルかカわワれレ白シラ髭ヒゲのノ神カミぞゾとトてテ玉タマのノ
 扉ヒラとト推オシしシ開ヒきキ社ヤシラ壇ノよヨ入イらラせセ給タマひヒ

拍子合点
出端

けり社壇より入らせ給ひけり
中 用丸心

ハ少女の返す袂の色らるる。宜禰カ
上

鼓も聲すみて静さび渡れる折柄
ツツミ

かあ神の人の教みよつて威と
行斗一後三白舞神上 明カ

増す。ましてやこれの勅の使作ま
えん又

てもあは余りあり
カ上

社壇の内よりも不思議や社壇の
カ上

ヨシ

乙

内よりも真なる妙ある声と出し
 靡もあつから朱の玉垣かやま
 渡る白鷺の神の姿現れたり
 あり有難の御事やがる奇持
 逢ふ事もたぐれ君の赤影と
 威候袖とうるほせり
 さらば夜もすがら舞樂の曲と奏し

丹上ニサアリ
 合ハス

シテ朝カニ

つ。勅使と慰め申さしと上奏神樂

催馬樂ウマノカケとウマノカケりウマノカケとウマノカケりウマノカケにウマノカケてウマノカケ神樂ウマノカケ催馬樂ウマノカケ

とウマノカケりウマノカケとウマノカケりウマノカケにウマノカケてウマノカケ系竹ウマノカケのウマノカケ役々ウマノカケ秘曲ウマノカケとウマノカケ盡ウマノカケしウマノカケ。

拍子ウマノカケとウマノカケ揃ウマノカケへウマノカケてウマノカケ夜遊ウマノカケのウマノカケ舞樂ウマノカケハ有難ウマノカケやウマノカケ

面白ウマノカケやウマノカケこのウマノカケ舞樂ウマノカケ面白ウマノカケやウマノカケこのウマノカケ舞樂ウマノカケ

のウマノカケ鼓ウマノカケのウマノカケ物ウマノカケのウマノカケつウマノカケからウマノカケ磯ウマノカケおウマノカケつウマノカケ波ウマノカケのウマノカケ聲ウマノカケ耳ウマノカケ松ウマノカケ

月のウマノカケ琴ウマノカケをウマノカケ調ウマノカケ心ウマノカケ耳ウマノカケとウマノカケ澄ウマノカケすウマノカケ折ウマノカケ柄ウマノカケよウマノカケ

ヨミ

ト

上神三合六天天つ清空の雲居かまわたり進シ湖

水ハクハの面鳴動するハ天燈龍燈ハの来現カわ

上月出端天女出ノル
早苗早苗神出神出
カ上カ上カ上カ上

天地チの兩燈リョウあらはれてテ天地チの兩燈リョウ

あらはれてテ神前カミマタ子供コみるミ山燈ヤマの光ヒカリ

山ヤマ河カハ茶チヤ木キああわわままわわたりたり日ヒ夜ヤのの勝カチ

劣レウええええささりりけけりりかかくくてて夜ヨももははわわ

○獨吟

明アキけけ方カタののかかくくてて夜ヨももささわわ明アキけけ方カタは

シニラ白シニラ髪ヒ此コノのノ切キけス行ユくク空カラもモ白シニラ髪ヒのノ昇ノ風カゼ。
シニラ白シニラ髪ヒ去サりテ行ユけスハハ切キけス行ユくク空カラもモ。
ニ彼カノとト返マシしシ。ヤラ雲クモとト穿スちチらラてテ天テン地チもモ別わかれレ。
トちチ歸カれレばバ龍リウ津シンのノ湖ウミ水ミヅのノ上ウヘ了ウチすス翔カつツてテ。
シニラ善セ哉ゼとト。ヤラ感カんン。ヤラ孤コへヘ女メのノ天テン路ロ又マタ立タ。
カ歸カれレばバ神カミもモ御ミ聲コエとトああげげてテ善セ哉ゼ。
カああれればバああのノああのノ神カミ津シンにニ御ミ暇ヒマ中ナカしシ。

白髪

十一卷

流る法^{アガ}侍^シとぞ^アあり^ニに^ハける^ウ。

盛久 概説

内十九卷ノ二

主馬判官盛久は平家譜代の勇士なるが、平氏没落の後京都に隠れぬたるを捕はれて鎌倉に送られんとせらる時、盛久警言護の土屋某に請ひ、日頃信仰せら清水観音に最後の参詣をなし、が、鎌倉に下りていよく形骸に會ふべき日至り、観音經を讀誦して土屋と共に此の經文の功德を称へ、夜も明けゆと頃形場に赴き、泰然として死を待ちしに、不思議にも骸手の翳せら太刀は段々に折れ、眼くらみて斬ることを得ずなりぬ。頼朝之を聞き、観音の功德に感じて死を赦し、酒宴を賜ひ、京に歸らしめけり。

此曲前ハ多少沈シテ節々ニ心シ後半ハ閑カニ確カリト謡フベシ
 小書 恐之舞

ワキツレ	ワキツレ	ワキ	シ	役	別	装束	附	季	所
太刀取	樂早二人	土屋三郎	平盛久			着附無色厚板 白大口 水衣 掛絡 腰帶 經懷中 水晶珠数持 物着白鉢巻 梨子打烏帽子 白大口 掛直唾 小刀 腰布 扇 梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 上下直垂 込大口 小刀 扇		三	前後 京相 都模 倉鎌國
						着附厚板 白大口 紋附腰帶 扇		月	
						梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 白大口 側次 腰帶 小刀 太刀		曲柄	
								目番二略 目番五四	
								級 一	

盛久

十郎元雅作

シテ盛久同極用カニ

早土屋

如行は去屋殿に申すべき事の依
 何事もそゆぞ 唯今閑東に
 下りあはれが限りあるべし。清水
 の方へ輿をと立てて給うるへ引られ
 こそ易き御事妙なり面々。東山
 の方へ輿をと立ててられ依へ

シテヤシ上^{用カニ}
拍子^{ヨウク}合^{カヘ}ス

南無やぶ慈大悲の観世音さ
も草さしも畏き誓ひの末一称念
あは頼ありましてや多年値遇
の縁縁空からんやあら御名残
借しや^{シテ用カニ}りつか又清水寺の花威
歸る春あまの^地神^{カニ}かあ^{シテ用カニ}音よ立て
ぬも音羽山^地龍^{カニ}つらると人知らじ^{キ上}

シテヤシ上^{用カニ}
元^カカ^ヘ用^{カニ}

見渡せば柳橋とてま交せて錦
と見ゆる故郷の空又いつかと思
ひ出の限りあるべき東路も思ひ
立つこそ名残あはれわれあまひ
まら馬の家よ生れ世よ隠れあま
身とて思ひつるおの格行の道楽の
東よ赴けへ跡白行と行く彼のいつ

盛入

歸カヘ入イまマ旅ツあらラんン 用九心 下中 ウケテ用カニ 梅子合 引はハ誰タレとトカ
 松マツ坂サカやヤ四シのノ宮ミヤ河カ京キョウ四シつツのノ辻ツジ 用九心 下中 ウケテ用カニ 梅子合 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ
上 明 カ 伸 ケ ト 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ
 行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ
 奴ヌもモ逢アハ坂サカのノ閑ヒラ守モリもモ今イマのノあワれレとト 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ
 よヨもモ留トめメ 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ
 立タちチ零シるル影カゲはハ鏡カミ山ヤマさサのノ又マタ年トシ經シぬヌ 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ

身ミあアれレもモ衰シのノ老オ蘇ソのノ木キ林リンとト過スぐグ
 身ミあアれレもモ衰シのノ老オ蘇ソのノ木キ林リンとト過スぐグ
 るルやヤ美ミ濃ノウ尾ビ張チヤウ熱ネツ田テンのノ浦ウラのノ夕ユフ汐シ
 のノ道ミチとト彼カはハ隠カクレされレてテ迎ムカれレるル野ノ邊ヘ
 鳴ナ海カイ鳥トウ又マタ八ハチ橋シやヤ高タカ師シ山サン又マタ八ハチ橋シ
 やヤ高タカ師シ山サン 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ
 のノ橋シとト打ウちチ渡ワタりリ 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ
 見ミんンとト思オモひヒまマやヤ令レイあアりリけケりリ小コ夜ヤ 引れレやヤこコのノ行ユクもモ歸カヘるルもモ別ワカれレてテはハ

の中^{ウチ}の^{なか}山^{ヤマ}の^{なか}これ^{これ}が^がさ^さよ^よ。
 地上^{チジョウ}の^の淵^{フチ}瀬^セの^の。
 大井^{オホイ}川^{カハ}の^の過^スぎ^ぎ行^クく^く。
 彼^カも^も宇^ウ津^ツの^のお^お。
 柳^{ヤナギ}え^えて^ても^も開^{ヒラ}く^く。
 清^{スガ}見^ミ鳥^{トリ}三^{さん}保^ぼの^の入^いり^り。
 海^{ウミ}田^タ子^この^の浦^{ウラ}お^おち^ち出^いで^で。
 見^ミれ^れば^ば真^{マコト}。
 白^{シロ}あ^ある^る。
 室^{ムロ}の^の富^{トヨ}士^しの^の嶺^{ミネ}箱^{ハコ}根^ね山^{ヤマ}あ^あら^ら。
 け^け行^いく^くや^や星^{ホシ}月^{ツキ}夜^ヨは^はや^や。
 鎌^{カマ}倉^{クラ}は^は着^ツき^きよ^よけ^けり^り。
 よ^よけ^けり^りは^はや^や鎌^{カマ}倉^{クラ}は^は着^ツき^きよ^よけ^けり^り。
 シテ中^{ナカ}折^セテ
 シテサシ上^{ウヘ} 用^{ヨウ}カニ
 フヨク
 拍子^{ウチ}合^{アヒ}ハス

夢^{ユメ}中^{ナカ}は^は道^{ミチ}あ^あつ^つて^て。
 塵^{チン}埃^{アヒ}と^と隔^{ヘリ}つ^つげ^げふ^ふ。
 や^やそ^そこ^こも^も知^チら^らざ^ざり^り。
 水^{ミヅ}と^と渡^{ワタ}つ^つて^て。
 年^{ネン}の^の栄^{エイ}花^カの^の塵^{チン}中^{ナカ}の^の受^{ウケ}一^{いつ}寸^{すん}の^の光^{クワ}陰^{イン}。
 和^ワ沙^{シャ}裏^{ウラ}の^の入^い金^{キン}け^け。
 千^チ代^{ダイ}も^もと^と契^{ケイ}り^り。
 友^{トモ}人^{ひと}も^も變^かる^る世^よあ^あれ^れや^や。
 わ^われ^れひ^ひと^とり^り。
 鎌^{カマ}倉^{クラ}山^{ヤマ}の^のも^も震^{ふる}け^けに^に。
 シテサシ上^{ウヘ} 用^{ヨウ}カニ
 フヨク
 拍子^{ウチ}合^{アヒ}ハス

かゝる身の習ユメかゝウかくてあからへシヨ
へよ面オモテとさニらニさんニよりカ天晴疾アツレうル斬ス
られハぞハやハと思ヒひハあハらハ痛イアハやハ威モ
久ヒのヒ獨ヒ言コトせシとシ作スせシのノ妙ミ妙ミすスまマしシしシゆユ。
去ツ屋チかカ集ジりリてテゆユ去ツ屋チ殿テンとトばバやヤ此コ方ハ
へ御オン入イりリゆユへヘ御オン下ゲ向カウのノ由ユとト枝エ露ロ
ヤヤしてシてテ佐サへヘ。急イぎギのノ誅チ一イチヤヤせセとトの

御事オンコトあアてテ佐サ唯シ今イもモ獨ヒ言コトまマヤヤ
しシかくクかくクてテあアからラへヘ諸シ人ニよヨ面オとト
さサらラさんンよりリもモ天ア晴ツ疾レうル斬キられレ
づヅもモのノ念ネ終ワシさサてテのノはハやヤあアひヒてテゆユ。
さサてテ最サイ期キのノ唯タ今イまマあアてテゆユかカいイやヤ街ヅ
最サイ期キのノ曉アカツキかカ御シらラずズのノ明ミ夜ヤかカとト
作ホせセ出イだダされレてテゆユ。今シてテのノ暫シ白ハくクのノ時ジ刻コク

はてしなくよきことこの猶去屋殿の
御芳志すすも互かあか思かあり。
又あからん跡一遍の念佛をも廻向
み預らば二空までのいせ芳志たるべし
われこの年月清水の觀世音を信
ト。毎日かの御經と懈る事あり。
さうなから今日か来た讀誦やさずん

猶よ御暇と賜つりゆかの御經と
讀誦したくゆ ワキウエテサアリ くれこそ有難う
他へ去屋もこれにて聽聞やさうす
るにてゆ シテ 阿カニ明カニ 有難や大慈大悲の菩薩
の悲願定業亦能轉は善薩の直
道とかや預つて無縁の慈悲と
至れわれと引導し終へ。今生の

利益も一^ト 缺け^カ 後生善可^ト 誰カ^ト
 頼も^ト 二^ト 世^ト の^ト 預望^ト も^ト 空しく^ト 大^ト
 聖^ト の^ト 誓^ト 約^ト 豈^ト 虚^ト 妄^ト に^ト あ^ト ら^ト ず^ト や^ト 或^ト 遭^ト
 王^ト 難^ト 苦^ト 隘^ト 刑^ト 欲^ト 壽^ト 終^ト 念^ト 彼^ト 觀^ト 音^ト 加^ト
 刀^ト 專^ト 股^ト 之^ト 壞^ト 者^ト 難^ト や^ト この^ト 御^ト 經^ト と^ト 聽^ト
 聞^ト 中^ト せ^ト ば^ト 御^ト 命^ト も^ト 頼^ト も^ト う^ト こ^ト そ^ト ゆ^ト へ^ト
 げ^ト へ^ト よ^ト く^ト ば^ト 聽^ト 聞^ト の^ト も^ト の^ト か^ト あ^ト こ^ト の^ト 文^ト と^ト

い^ト づ^ト だ^ト と^ト ひ^ト 人^ト 王^ト 難^ト の^ト 災^ト 逢^ト み^ト と^ト い^ト づ^ト
 と^ト も^ト その^ト 鋼^ト 候^ト 之^ト 折^ト れ^ト 又^ト 衆^ト 惡^ト 毒^ト
 退^ト 教^ト と^ト い^ト づ^ト ば^ト 射^ト る^ト 矣^ト も^ト その^ト 身^ト 之^ト
 立^ト つ^ト ま^ト づ^ト け^ト れ^ト ば^ト げ^ト に^ト 頼^ト も^ト う^ト づ^ト かり^ト
 亦^ト 若^ト し^ト 金^ト 之^ト 命^ト の^ト ため^ト ば^ト この^ト 文^ト を^ト 誦^ト
 する^ト ば^ト あ^ト ら^ト ず^ト 種^ト 々^ト 諸^ト 惡^ト 趣^ト 地^ト 獄^ト 鬼^ト
 畜^ト 生^ト 生^ト 老^ト 病^ト 死^ト 苦^ト 以^ト 漸^ト 悉^ト 令^ト 滅^ト 令^ト 滅^ト

下中用カ確カリ
この文の如くハ諸々の悪報も三

惡道ハ遁るべしヤ有難しと夕露

の命ハ惜まずた後生こそ悲しけれ

○公議
上中用カ重シモト低ク
昔在靈山の法華一佛今西

方の主又ハ汝等現し給ひて我等

カ為の觀世音三世の利益同トくハ

かく刑戮も近き身の擡ぎよいかで儂

るべしや威久か終の道よも園からじ

頼もしや。あら不思議や少し睡

眠の内はあられたる靈夢と蒙り

てははいかよ。あら有難やハ

拍子三合ハズ
ツヨク
既ハ八聲の鳥鳴いて最期の時節

唯今あり。そはや御出でハ入とよ

シテ内
侍ち設けたる事あれば左よハ金泥の

御經右に念ひの珠の緒の命も今
 と限りあればされどこの世と門出の
 庭は是よわよわと立ち出づる武士
 前後と圍みつゝこれぞ別れの鳥の聲
 鐘も聞ゆる東雲よ 宇より籠の
 輿よ棄せ 由比の行に 急まけり
 夢路と出づる曙や 夢路と出づる
 次才月 用が重なり 拍子三合
 ミテ因か朗カニ

曙や後の世の門出あるらん 耳かて
 由比の行よ着きかば 庭敷と定め
 ぬ皮敷かせ 早と直らせ 鈴あべ
 盛久やがて 庭よ直り 清水の芳の
 具方そと 西よ向ひて 観音の馬名
 と唱へて 侍りければ 刀取後は
 まわりつゝ 称念の聲の下よりも ね
 ミテ内カウテ

刀振りよぐればこは妙なり。御経の
 光眼も塞がり取れ落したるを刀と
 見れば二つは折れて殿々もある。こは
 そも妙なりある事やらん。威久も
 思ひの外あれはたは死にたれ居たり
 いやいや作とか疑めばまこの程讀
 誦の御経の文。臨刑歎事終

早カル上

カル上

シテハ九カ人用カニ明カニ

念彼観音が。カ素。殿々壊の

拍子合

同上

經文あらたは曇りあまき。殿々に折
 れよけり。事世あてのあかりけり。あら
 方難の御経や。やかてこの由聞し
 召し。急ぎは前もあれまの御使度
 々々重あれば召に随ひ盛久の鎌倉
 殿も事りけり。鎌倉殿も事りけり。物着

物着

早の先ラカケ

妙中又盛久は前までゆ。君この曉不
 思議あるはも並夢又の御告あり。感
 久も若し夢やんけりとの御事
 みてゆ。何とかが隠しやすま。今夜
 不思議の靈並夢と夢家りてゆ
 さらばその靈並夢のやうと。は前
 てまわすく。中し上げられゆ。

ワキサテ

シテウケテ用カニ

○サニ面独吟
○切迄離子

シテウケテ

長つてゆ。それ不純正覺の御扱
 今以つて始めあらず過去久遠の大悲
 の光いつく不到の可あらん。然る
 にわれこの光陰を頼み日夜朝暮
 怠らすかの御經と修讀せしに
 取り分まこの時節刑戮又近ま
 身と思つて。片時怠る事もなく

クリ上

抱子合

不純

正覺

御扱

今以つて

始め

あらず

過去

久遠

の大悲

の光いつく

不到

の可

あらん

然る

にわれこの

光陰

を頼み

日夜

朝暮

と

怠らすかの

御經

と修讀

せしに

取り分ま

この時節

刑戮

又近ま

身と思つて

片時

怠る事

もなく

盛久

上

夢に覺るべしと宣ひて夢は
即ち覺めよけり威久貴く思ひて
歎きの心限りあし。頼朝これと聞し
る。この曉の心夢想も同く告そ
とあらたあるは信威の限りあし。其の
時威久の夢の集めたる心ありて。
威候ととあかね御前を罷り立ちけ

地上カシテサラリ
れ。妙アは威久暫くして清麿を
よびて召さるれ。母ん方もあは威
久が。日中サラリ。威久の春を祝みそ
と。御盃を下さるれ。種のお付けと
菊の酒。地上サラリ。元カハ
妙アに威久。威久の平家権代の侍
武畧の達者殊にの乱舞堪能の由

聞しるる及ぞれたり。一年小松殿北山
 又て茸狩の遊路の由酒宴又おいて。
 主馬の威久一曲一奏の事。閑東ま
 ても隠れぬ。殊又これの悦の折あれ。
 たり。さうさの山前堂あり急いで侍り
 シテウチ
 難し。難し。難し。得たたまきの時。去り
 〇難子に
 難きの貴命あり。威久かゝる時節。又

逢ふ事。世以つてたぬしあるべからず。活ま
 り靡く時なれや。天四海の内のみか人
 の國まで日の本の。唐土かゝるもその處
 キリ地上 朝カミサアリ
 拍子合
 酒宴半の春の興。酒宴半の春の興
 曇らぬ日影のどかよて。君と祝ふ千
 秋の鶴か園の松の葉の教り。失せず
 してたまき。のかつら。長春の心

れあり。長石は忘れありと罷り申す。
 一侍り退出しける。威久カ心の中ぞ
 ゆき心の申ぞゆき。

佛原 概説

内十九卷ノ三

都の僧加賀國佛原に到りしに、女性一人出て來りて讀經を請ふ。僧仔細を問へば、昔
 平清盛、妓王妓女といへる二人の白拍子を寵愛しけるが、佛御前といへる白拍子寵を
 得るに及びて二人は逐はれ、嵯峨の奥に佗住しけるを、佛訪れしに、二人は今まで
 佛を怨みしを悔い、眞の佛なりとて喜びしが、其の後佛は故郷なる此の
 佛原に歸りて空しとわづける由委しと語る。僧女の誰なるかを尋ねれば、
 暗に佛なることを告げて侍なる草堂に入りしが、僧の讀經にひかれて佛の
 靈有りし世の姿にて現れ、世は一睡の夢なるらとを歌ひ、舞ひていつともな
 へ消え失せけり。

此曲林シキ中ニモ優ニ美シクシツトリト謡フ心アルベシ

役別	ワキ 振僧(下り僧)	ワキツレ 從者二人	前シテ 里女	後シテ 佛御前
装束	角帽子 着附無地鬘斗目 水衣 腰帶 扇 珠数	角帽子 着附無地鬘斗目 水衣 腰帶 扇 珠数	面若女 鬘 雙帶 着附摺箔 唐織着流	面若女 長絹 鬘 雙帶 着附摺箔 箔地腰卷
季	九	月	曲柄	三番目 (物葛)
所	加賀國石川郡佛原	一	碓古嶺	級

佛原

世阿彌元清作

ワキ僧
用カニ
早ツレ
二人
次才上
ヨウク
伯子ニ合

よそは指の秋深まよそは指の秋深
 ま雪の白山尋ねん 引れ都方よ
 り出でたる僧にてのわれ未だ白山猿
 定せずの猿よその秋思ひ立ち白山禪
 定と志しての道行天上の用カニ
 越の白山知らざりし其方の

雲も天照す。祚の権のもみぢり葉の。
 折るひの色もいやは高き峰々早く廻り
 来て、年終するぞ。有難き糸詣する
 ぞ有難き。 早河 気ラカ 急ぎの程よ。これのはや
 加賀の國佛の原とやらんやししぬ
 日の暮れての程よ。これなる草堂に
 立ち寄り。一夜と明さばやと思ひひ

シテ女伸ケト用カニ
 呼哉

あうなるあれなる御僧。行とて
 その草堂に御泊りゆぞ。不思議
 やお道もあく里もあきの方より。女性
 一人来りつらわれは言葉とかけ絵みは。
 如くある人にてましますぞ。 シテ用カニ
 この佛の糸よ候む女にてぬ時
 こそあれ今宵も。この草堂よ

御伯こそ。有難き機縁にてま
 ませ。今日思ひ日にあたり。御經
 を讀み佛事とあつてたびたび
 きたよ五障三後のこの身あれば速
 の雲も暗れ難き心の水の濁りと澄
 して涼き道よ引道守り終へ
 御經と讀み佛事とあせと承ふそれ

こそ出家の望みあれ。こそして用ひ
 やすへま。七老の准にてま。ますそ
 さらばその名とあらはすべし。古佛
 は前とや。白拍子は。この國より
 出でし人あり。都よりより舞女の答
 せ。勝れ給ひ。が後の故郷あれば
 とて。この國は歸り。終よこ。にて

佛京

三

空しくある跡のきるもこの草
 堂の露と消えにしその跡あり
 不思議やそそひ古のその名も聞え
 佛の前のあき跡までも名を
 とめて佛のそとに名も音と
 きむる名跡あれば今も疑ひ
 あま成佛の縁あるその人の

○小論

あも頼も一や一佛成道 観念
 法界草木国土悉皆成佛と聞
 く時は佛の身の草木まで佛の系
 の草木まで皆成佛の疑はず有
 難や折からの飛もせよすたく虫の
 音までも聲身佛事とやあぬらん
 山風も夜山風も聲身澄み渡るこの

愿のまよふも心あるやらん草木も心
 ありやらん。お原なほ佛の前の
 御事委しく御物語りゆへ
 國の御時妓女佛刀自多て温顔
 舞曲花めりて安しよあそえし遊女
 ありしよ。始めは妓女を召し置かれて
 遊舞の寵愛甚しくして色香と

○サシ曲独吟

飾る玉衣の袖の白露起き臥しの
 市簾の内ときちり去らでまあから
 宮女の如くありしに思はざるに
 折と得て佛の前のを召されしより御
 心うつりてらつアかな妓女の出たされ
 まあらせせて母を秋風の音交けて
 涙の雨もどやみもせずけにや

佛屋

五

思ふ事。かあはねむこそ。浮世なれ。わ
 れの固より。優色の。花。一時の盛。りあは
 ぬ。散ると。何と恨みんや。嵐。吹けども
 松の固より。常磐あり。うら。歎き。いつ
 驚かん。浮世。そと。思へ。ばかり。お。節
 の。来。る。こそ。教。あ。れ。か。も。迷。ひ。を。照
 す。ある。強。陀。の。浄。國。も。其。方。そ。と。

頼みと。かけ。て。西。山。や。う。ま。世。の。嗟。哉
 の。奥。深。き。草。の。庵。は。隠。れ。家。の。隠
 れ。て。住。む。と。思。ひ。し。又。思。ひ。の。外。あ。る。佛
 心。前。の。換。と。か。り。来。り。たり。て。何。そ。も
 さ。ら。に。て。も。か。く。捨。つ。る。身。と。あ。り。ぬ。れ
 ど。あ。は。も。御。身。の。恨。め。し。ま。の。執。心。ハ。ト
 残。る。よ。そ。も。か。る。心。持。つ。人。か。や。今。う。こ

其真の佛トみてもトませしてト枝玉の
 手と合せ感涙を流すばかりありト
ロシギ上昔語のさそておきぬ。さそて今跡を吊ひ
 給み御身妙あり人やらんトわれト
 惟とか忠代の松の葉結ぶ露の身の
 行方と行と向ひ給みト行方いつく
 と白雪の跡と見よとはこの原の

シテ草の庵のてあれやト露の身をおく
シテ草堂の日主の佛とし云ひ捨て立
 ち去る影ハ草衣尾花が袖の露
 分け草堂の内は入りけり草堂
 の内は入りけりト中入間
早上ト三ト人待ト議ト
〇切ト送ト雜ト子ト
 松風寒まきこの原のト松風寒まき
 の原の草の假寝のトとことばは法

とあして夜もすがらかの跡吊みぞ
有難まかの跡吊みぞ有難ま

後シテ女上 用カ伸タト
一声 拍子合六

あら有難の御經やあまや咽け方
ももあやらん遠寺の鐘も幽かな
響き。月落ちかゝる山草の月照し
き假寐の床は夢ばし覺し絵み
あよ 弘思議やあ佛の厚の茶枕は

遊女の影のんえ絵みあやこま團ま
つる佛は前の幽室にてぞま
すらん 恥かしあから古の佛と

いとわ名を便りて輪廻の姿も歎
舞とあす 極楽世界の法法の聲
佛事とあすや 引の京の佛の舞の
妙ある袖 草木も靡く氣色かあ

シテワカ^{用カニ伸ヤト}

ひらき^{シテ中ニ用カニ}ありあ^{シテ中ニ用カニ}ら^{シテ中ニ用カニ}佛の^{シテ中ニ用カニ}声^{シテ中ニ用カニ}名^{シテ中ニ用カニ}と^{シテ中ニ用カニ}尋^{シテ中ニ用カニ}ね^{シテ中ニ用カニ}ん^{シテ中ニ用カニ}

地上^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}あ^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}歸^{シテ中ニ用カニ}る^{シテ中ニ用カニ}法^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}場^{シテ中ニ用カニ}人^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}法^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}場^{シテ中ニ用カニ}人^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}

○仕舞^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}法^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}教^{シテ中ニ用カニ}へ^{シテ中ニ用カニ}も^{シテ中ニ用カニ}幾^{シテ中ニ用カニ}程^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}世^{シテ中ニ用カニ}ぞ^{シテ中ニ用カニ}や^{シテ中ニ用カニ}

過^{シテ中ニ用カニ}き^{シテ中ニ用カニ}ぬ^{シテ中ニ用カニ}後^{シテ中ニ用カニ}佛^{シテ中ニ用カニ}は^{シテ中ニ用カニ}未^{シテ中ニ用カニ}だ^{シテ中ニ用カニ}あ^{シテ中ニ用カニ}り^{シテ中ニ用カニ}

中^{シテ中ニ用カニ}興^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}世^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}内^{シテ中ニ用カニ}ぞ^{シテ中ニ用カニ}や^{シテ中ニ用カニ}

郷^{シテ中ニ用カニ}音^{シテ中ニ用カニ}ま^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}鳥^{シテ中ニ用カニ}も^{シテ中ニ用カニ}音^{シテ中ニ用カニ}と^{シテ中ニ用カニ}鳴^{シテ中ニ用カニ}く^{シテ中ニ用カニ}

内^{シテ中ニ用カニ}なる^{シテ中ニ用カニ}夢^{シテ中ニ用カニ}幻^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}一^{シテ中ニ用カニ}瞬^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}内^{シテ中ニ用カニ}ぞ^{シテ中ニ用カニ}佛^{シテ中ニ用カニ}も^{シテ中ニ用カニ}あ^{シテ中ニ用カニ}

可^{シテ中ニ用カニ}也^{シテ中ニ用カニ}

る^{シテ中ニ用カニ}ま^{シテ中ニ用カニ}ま^{シテ中ニ用カニ}し^{シテ中ニ用カニ}て^{シテ中ニ用カニ}人^{シテ中ニ用カニ}間^{シテ中ニ用カニ}も^{シテ中ニ用カニ}

の^{シテ中ニ用カニ}風^{シテ中ニ用カニ}吹^{シテ中ニ用カニ}く^{シテ中ニ用カニ}雲^{シテ中ニ用カニ}水^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}天^{シテ中ニ用カニ}は^{シテ中ニ用カニ}浮^{シテ中ニ用カニ}め^{シテ中ニ用カニ}る^{シテ中ニ用カニ}彼^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}

備^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}露^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}始^{シテ中ニ用カニ}め^{シテ中ニ用カニ}を^{シテ中ニ用カニ}ば^{シテ中ニ用カニ}行^{シテ中ニ用カニ}と^{シテ中ニ用カニ}か^{シテ中ニ用カニ}か^{シテ中ニ用カニ}へ^{シテ中ニ用カニ}す^{シテ中ニ用カニ}舞^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}

袖^{シテ中ニ用カニ}一^{シテ中ニ用カニ}歩^{シテ中ニ用カニ}集^{シテ中ニ用カニ}げ^{シテ中ニ用カニ}る^{シテ中ニ用カニ}先^{シテ中ニ用カニ}と^{シテ中ニ用カニ}こ^{シテ中ニ用カニ}そ^{シテ中ニ用カニ}佛^{シテ中ニ用カニ}の^{シテ中ニ用カニ}

舞^{シテ中ニ用カニ}と^{シテ中ニ用カニ}は^{シテ中ニ用カニ}り^{シテ中ニ用カニ}あ^{シテ中ニ用カニ}び^{シテ中ニ用カニ}け^{シテ中ニ用カニ}れ^{シテ中ニ用カニ}と^{シテ中ニ用カニ}謠^{シテ中ニ用カニ}ひ^{シテ中ニ用カニ}捨^{シテ中ニ用カニ}て^{シテ中ニ用カニ}失^{シテ中ニ用カニ}

せ^{シテ中ニ用カニ}に^{シテ中ニ用カニ}け^{シテ中ニ用カニ}り^{シテ中ニ用カニ}や^{シテ中ニ用カニ}謠^{シテ中ニ用カニ}ひ^{シテ中ニ用カニ}捨^{シテ中ニ用カニ}て^{シテ中ニ用カニ}失^{シテ中ニ用カニ}せ^{シテ中ニ用カニ}ふ^{シテ中ニ用カニ}

け^{シテ中ニ用カニ}り^{シテ中ニ用カニ}。

事^{シテ中ニ用カニ}記^{シテ中ニ用カニ}

二^{シテ中ニ用カニ}

善知鳥 概説

内十九卷ノ四

諸國一見の僧、越中國立山にて、其の様すさまじき老人に會ひ、陸奥へ下らば、
外の濱にて去年の秋身まかりたる者の妻子を訪ね、蓑笠を手向けくれよと
の傳言を頼まれれば、易き事なれども、證據無として承引ある事と
答へに、着たる麻衣の袖を解き、之を以て差出し、僧は受取りて相
別れぬ。とかくして旅僧は外の濱に彼の妻子の家を尋ね當て、蓑笠を手向
けしに、亡靈現れ出で、娑婆にて獵師を渡世とせし報にて諸鳥に責めらるる
苦患の様を示し、僧に助を求めて失せけり。

此曲サラリト居着カヌ様ニ謡フベシ
小書外濱風

役別		装束	附	季
ワキ僧	角帽子	着附無地熨斗目	水衣 腰帶 扇	四
前シテ 獵師ノ靈	面笑討、朝倉討ニモ 射扇	射髮	着附無地熨斗目 茶水衣	月
子方 千代童(謡ナシ)	着附縫箔 兒袴	紋附腰帶	扇	曲柄
ツレ女 獵師ノ母	面深井 鬘	鬘帶	着附摺箔 無色唐織普流	目番四
後シテ 獵師ノ靈	面瘦男、河津ニテモ 黒頭 黒鉢卷	着附無地熨斗目	白縛水衣 縫紋腰帶 羽簾 善知鳥扇指入 杖突	目番二略
				級
				三
				管古順
				山立郡川新下頭中越 濱々外國樂陸 前後
				所

善知鳥

世阿彌元清作

早僧河

これの諸國一見の僧少てゆわれ未だ
陸奥外の濱と見ずの程よその
度思ひ立ち外ツトの濱一見と志し
てゆシラカ又よまき序ツイデ少てゆ程よ。立山ヤマ彈ゼン
定イサヤカとシあトゆノ急キぎノ程ニ。
これノさカ立ちよまきしてゆの心持ちか

けりていれよと作せ入 ワヤカサテ これの思ひも
よらぬ事と承りゆものかある處け
やすべき事の易き程の御事にてゆ
さうあからよりの空よりしてゆはか
ぬ義引作へま シヨクイシ げに確 タシカ あるまじし
なくてはむかひあるまじ 抑テ輕ク や思ひ出で
たりありし世の今ぬの時までとあ

拍子合 中 洞カニ持シ
射 ゴ 木曾の麻衣の袖と解きて
拍子合 されとまじ 抑テ輕ク 候と添へて旅衣
候と添へて旅衣立ち別れ行く
その跡は雲や煙の立山の木の芽も
萌ゆる遙々と客僧の奥へ下れ七者
の遠く遠く見送りて行く方知らずあ
りてけり行方知らずありはけり 中

三

三

ツ母上ツ母上

げにや固ツ母上よりも定めあま世の習ツ母上ひぞ
とぞひあがらも夢の世ツ母上のあたよ
契ツ母上りし恩愛ツ母上の跡ツ母上の忘れ形ツ母上
見ツ母上それさ入深ツ母上まかあツ母上みの母ツ母上が思ツ母上ひ
と如何ツ母上よせんツ母上 妙ツ母上よその屋ツ母上の内ツ母上へ
案内ツ母上やしひとんツ母上 誰ツ母上よて渡ツ母上りゆぞ
引ツ母上れ諸國ツ母上一見ツ母上の僧ツ母上にてゆかツ母上立ツ母上山ツ母上禅ツ母上

口羊口羊カシ用口羊

定口羊やし住所口羊よその様口羊すこま口羊りま
老人口羊のあり口羊か陸奥口羊へ下口羊ら口羊ば言口羊傳口羊
すべ口羊。非口羊の償口羊よての猶口羊解口羊よてゆ
者口羊の去口羊年口羊の秋口羊身口羊ま口羊かり口羊てゆ口羊その
妻子口羊の宿口羊と尋口羊ねてそれ口羊よ口羊簑笠口羊
手口羊向け口羊てくれよと俵口羊せる程口羊よ上口羊
の空口羊よ口羊ししてゆ口羊はか法口羊承口羊引口羊依口羊

口羊

口羊

ぶきんがしてゆづその時あきたる
 麻衣の袖と解きてたまつりてゆ
 程よ。それまで持ちてまうてゆもし
 思し召し合する事のゆか ツレ中田カニ 引れは
 夢かわ淡まや 中 での田長の七
 まへのよ ツレ 聞ま カニ あ カニ ぬ カニ 候 カニ な カニ ざ カニ り
 あ カニ づ カニ ら カニ あ カニ ま カニ づ カニ へ カニ び カニ め カニ へ カニ あ カニ ぎ カニ の カニ 御 カニ 事 カニ あ

カニ上 れ カニ上 び カニ上 ぼ カニ上 や カニ上 形 カニ上 へ カニ上 と カニ上 簑 カニ上 代 カニ上 衣 カニ上 ま カニ上 づ カニ上 候 カニ上 よ
カニ上 織 カニ上 れ カニ上 る カニ上 藤 カニ上 袴 カニ上 頃 カニ上 も カニ上 久 カニ上 き カニ上 の カニ上 形 カニ上 見
カニ上 あ カニ上 づ カニ上 ら カニ上 今 カニ上 取 カニ上 り カニ上 出 カニ上 づ カニ上 由 カニ上 へ カニ上 候 カニ上 べ
カニ上 疑 カニ上 も カニ上 夏 カニ上 立 カニ上 つ カニ上 今 カニ上 日 カニ上 の カニ上 薄 カニ上 衣 カニ上 夏 カニ上 立
カニ上 つ カニ上 今 カニ上 日 カニ上 の カニ上 薄 カニ上 衣 カニ上 一 カニ上 重 カニ上 あ カニ上 れ カニ上 づ カニ上 も カニ上 念 カニ上 す
カニ上 れ カニ上 べ カニ上 袖 カニ上 あ カニ上 り カニ上 け カニ上 る カニ上 ぞ カニ上 あ カニ上 ら カニ上 ち カニ上 づ カニ上 形 カニ上 の カニ上 形
カニ上 見 カニ上 や カニ上 や カニ上 ち カニ上 て カニ上 そ カニ上 の カニ上 儘 カニ上 申 カニ上 比 カニ上 の カニ上 法 カニ上 と カニ上 重 カニ上 ね

カニ上

カニ上

教の中ウチノミヤに亡者シヤウジャの望ノゾミむあるアル。簞笠タナカサを
 こそ。手テ向けムケれレ。簞笠タナカサをこそ。手テ向けムケれレ。
ワキ中用カ別ニ生シ南無ナムボ。幽ユイ。靈レイ。出シュツ。離リ。生シヤウ。死シ。煩マン。證テイ。菩ボ。提テイ。
後シテ獵師中用カ陸奥リウオウのノ外ソトのノ濱ハマあるアル。呼ヨブ子コ鳥トリ鳴ナク。
一声あるアル。聲コエのノうウらラもモやすヤスかカたタ。一ヒト見ミ率ソウ都ツ。
 婆バ永エイ離リ三サン惡アク道ダウこのノ文モンのノ如ニくクはハたタ
 とトひヒ拜イハヒしシたりリもモ長ナガくク三サン惡アク

道ミチとトへヘ過ワタるルべベしシ。如ニ乎カにニいイもモんンやヤらラのノ。
 身ミのノたタめメ造ゾウ立リツ供キョウ養ヤウはハ預ヨクらラんンをヲやヤ。
中たタとトひヒ紅ベニ蓮レン大ダイ紅ベニ蓮レンありアリもモ名ナ號ガウ。
 智チ火カのノ消シユえエぬヌべベしシ。焦セウ熱ネツ大ダイ焦セウ熱ネツ。
 ありアリもモ法ホウ水スイはハ勝カチたタとトきキりリあアりリ。
 らラこコのノ身ミのノ重オモシきキ罪ツミ科カのノ心ココロのノいイつツかカ。
 やヤすヤスかカたタのノ鳥トリ獸モノとト殺コロスしシ。
中用カ衆シュウ罪ツミ如ニ

中用カ

六

霜露惠日のりよ照し鈴へ御僧

○小菰
上三日月

可の陸奥の可の陸奥の奥に海

ある松系の下枝に交トる竹蘆の

末列きりせむ浦里の籬が鳩の苔

屋形。圓すれどまをらにて。月

のたぬよの外の濱心ありける。任右
かな心ありける任右かな。あれ

ともいさふ形や消えあんと親子手

よ手と取り紐みて。後くばかりある。

方扱かあ哀わけに古のさしも契り

し妻や子も。今うらうらうの音に位

までやすかたの鳥の安からずや行

しよ殺しけん。我か子のいとほしき

ぬくみこそ。鳥歎も思みらあし。千代

○小謡

童が髪をとかす撫でる。あらあつかい
かといもんとすれば。掛障の雲の隔
か悲しやあ。雲の隔か悲しやあ。今
までいんえ。姫小松の。かまわい
づくも木隠れ。松の國の。和田
の笠松や箕面の。津波も我が
袖よ。立つや。率都婆の。その。誰が

○サニ曲後吟
○切迄難子

クリ上
拍子合ズ

笠ぞ隔てありけりや。松嶋や。雄島の
苔屋内床。われは。外の。濱の。鳥
音よ。まて。位く。より。外の。事ぞ。あま
行事。御流。く。す。へ。て。夢。に。似
たり。舊遊。零落。して。半泉。に。席す

高の家も。生まれず。又は。琴。日。念。書

シテサシ上
用カニ

畫シテ上男とたツあむ身ツもあらず

夕シテ上男明けても暮れても殺セ生シをい

あみ遅野上男々たる春の日も前シ作シたらねバ

時シと失シひ秋シの夜長ガ一ツ夜長シけれ

どもシ。煖シ火シ白シうシて眠シる事シあり

九シテ中夏シの天シも暑シと忘シれシ去シ冬シの朝シ

も寒シからずシ。魔シと逐シふシ猶シ解シハシ山シと

見シずとシい事シありシ。身シのシ苦シさシも

悲シさシもシ志シれシ茶シのシ進シ鳥シ高シ繩シと

さシ引シくシ夕シのシ末シのシ松シ山シ風シ荒シれてシ独シ

又シ彼シこシすシ仲シのシ石シ又シはシ于シ傳シとシてシ海シ

ごシありシしシ里シまでシもシ子シ賀シのシ塩シ籠シ

身シとシ焦シすシ報シとシもシ忘シれシけシるシ事シ業シ

とシあシしシ悔シとシさシもシさシもシさシもシさシもシさシもシさシもシ

やすかたのとりどりに。おかしきりたる。
殺生のう。中はそむやあまの鳥の。
愚かなるかな。筑波嶺の。おどの指。
も。卵と敷き。彼の浮巢ともかけ。
よか。平砂。ま子と生みて。落鷹の。
まかあや親の隠すと。まれどうと。
と呼ばれて。子のやすかたと。唇へけ。

りこそぞと。られやすかた。引と。うり。細上。
親は空まで。血の涙と。親は空にて。
血の涙と。降らせば。濡れど。菅。長。
わ。まを傾け。さ。か。この。便と。本め。
て。隠れ。ま。隠れ。養にも。あらざれば。か。
ほ。降り。か。る。血の涙。目も。紅。は。深。み。
渡。る。は。紅。葉。の。橋。の。か。さ。さ。き。か。せ。頭。切。

○仕舞
○独吟
○月上

安波安にては善知鳥やすかたとえ
えも善知鳥やすかたとえ
も冥途にしては怪鳥とあり罪人
を追つ立てて鐵の嘴と鳥らし羽と
たまの銅の爪と磨ぎ立てて眼
をつかんで肉むらとさげがんとす
ねも猛火の煙又むせんで聲と

あげえぬは鴛鴦と殺し科やら
ん逃げんとすれど立ちえぬは羽
抜鳥の報り羽と却つて鷹と
ありわれの雉とぞありたりける
遁れ交野の狩場の吹雪に空も
恐ろし地と走る大鷹は善知鳥められ
てあら心うとらやすかた安き際

上

下

あまの身の苦みど。助けけてたべや。御
 僧助けてたべや。御僧といふか
 思へば失せにけり。

小塩

概説

内十九卷ノ五

都の人々花見んとて大原野に赴き、老翁花の枝をかざりて群衆の中に
 立ち交れるを見、いづとよりの人々と問へば、古歌を引きて姿は老いたれども
 心は花よほさばなるべしとの意を述べ彼の「大原や小塩の山もけふこころは神代
 のことも思ひ出づらめ」といへる業平の歌など語りて興じぬたるが、夕日かげ
 らふ頃いづともなほ見えすなりぬ。夜に入りて業平の霊有りし世の姿
 よて現れ、古をしのびて歌をうたひ舞を舞ひ、夢の如くに消え失せけり。

此曲ハサマデ重シト云フニハ非サレド然ジテ閑カニ重シモリト諺フヘキナリ

役別	ワキ 花見ノ男	ワキツレ 同二人	後シテ 在原業平
装束	着附段鬘斗目 素袍上下 小刀 扇	着附無地鬘斗目 素袍上下 小刀 扇	面中將 初冠 着附赤地縫箔 單袴衣 込大口
季	三	月	曲柄
所	山城乙訓郡大原村	皆古順	目番三略 目番四
			級 四

小塩

禪竹氏信作

ワキ男
ツヨク
次オ上
柏子合

花よりうらみ 願の雲 花よりうらみ
 願の雲 かるや心あるらん
 小者以下 京島よ 住居する老あて
 ゆきそても 大原野の 花今を 感ある
 虫承り 及び山 回若き 人ぞと 伴ひ中
 し 唯今 大原山へ と 急ぎ 伝

小塩

サシ上

面白やいつくはあれど可から花も

拍子合ハナ

都の名や負へる大原山の花梅

上ホ三人用カニ

今と盛りと木綿花の今と盛りと木

拍子合

綿花の手向の袖も入よ色そよ

ハト心

春の時と得て神もまきほる塵

中用丸心

の世の花や心よまかすらん花

ハト心

心よまかすらん

シテ尉上

去せりして花をかぎの袖あから

一セイ

老い木の葉と人や見ん 年あれば

拍子合ハナ

齡は老いぬしかなあれど花と

ハト心

見れもの思ひもあし讀みしも

ハト心

身の上よ今白雪と轉くまで老に

ハト心

あたる春の日の長閑けき馬代の時あ

ハト心

れや教りもせず嘆きも残らぬ花

○小謡

ハト心

盛シカ。嘆トクきも。残ノコらぬ。花ハナ。盛シカ。四ヨ方ハツの。氣キ色シキも。
一ヒト入ツク。自ミひ。満ミち。色イロ。よ。そ。み。情ナリの。道ミチ。よ。
後ノチ。つ。老オホい。か。厭イヤひ。ろ。花ハナ。心ココロ。老オホい。か。厭イヤひ。
ひ。そ。花ハナ。心ココロ。不フ思シ議ギ。や。か。貴キ。賤セン。群グン。集ジュの。

その中ナカ。は。殊コト。年トシ。た。け。た。る。老ラウ。人ジン。花ハナ。
の。枝エダ。と。か。ぎ。り。さ。も。花ハナ。や。か。み。と。え。終ハジメ。み。
は。そ。も。ら。づ。く。よ。り。来キタ。り。終ハジメ。み。ろ。う。思シ。ひ。

よ。ら。ず。や。貴キ。賤セン。の。中ナカ。は。わ。き。ま。て。言コト。は。お。と。
か。け。終ハジメ。み。は。さ。も。か。あ。さ。山ヤマ。賤セン。の。身ミ。も。
鹿シカ。せ。ぬ。花ハナ。す。ま。い。そ。し。お。嘆トク。ひ。あ。る。か。
人ヒト。々々。と。嘆トク。こ。そ。山ヤマ。の。か。せ。ま。い。は。似ニ。たり。
と。も。心ココロ。は。花ハナ。よ。あ。ら。た。し。こ。そ。な。ま。は。あ。ら。
め。わ。心ココロ。か。ら。ら。て。同ドウ。中チュウ。サ。ア。ン。
す。ら。め。の。は。し。や。こ。の。身ミ。の。理リ。れ。亦モ。の。朽ク。

ちほ果てーあや心の色も音も
イコトノ中 人ぞ知らずお問を絵ひら
イコトノ中 面白のたのむれやおよも真よハ腹きて
 絵のいかさまぬあふ心之葉の奥床
 ーまをと語り絵へ 何と語らん花盛
シテ用カニ明カニ
 ーよなむぬげーまをばいから思ひ
男の上 絵みらん げにげよ妙ある指の色
神を食マ

○小話

うろみ影も大原や小塩の山のお
 松が原より。煙る霞の遠山梅 黒
マツノハラ 軒端の家ごくら 白めや窓の梅も
ハキ 咲き ーあかねさす日も紅の霞
ワキ ー雲か ー重 九重の 都邊ハ
ワキ ーあべて錦とありにけり。あべて錦と
ワキ ありまけり。梅と折らぬ人しあまの花
ワキ

夜美はけりお時も日も月も孫生
逢ひよあし眺めかあけお大原や小塩
の山も今日こそは神代も思ひ知られ
けれ神代も思ひ知られけれ。
早月サアリ

かろ面白き入よまうあひておものかま。
このまゝ御供申したさるも眺めうずる
はてふ。又唯今の言葉葉のまはスるや

小塩のまも今日こそは神代の事も
思ひ出づらぬ。今前から面白うなれぬ
ぬりなる人の心詠教みそゆぞ 事
あたらしき問事かあ。この大原野の
行幸も在愿の業平供を給ひ
時おくも后の御事と思ひ出でる。
神代の事とハ讀みとありがすすに

小塩

五

つけてわれあぐら。空恐ろしや天地の
 神の御代より入の身の妹背の道
 浅からぬ。名残小塩の山深み。名残
 小塩の山深みの。深りての世の物語
 稽るも昔男あはれ。着りぬる身の程
 歎きても。かひあかりけり。歎きても
 かひぞあかりけり。飛は山賤のさ

もげよ。まきさる人こゝろゆる。よもびあ
 りける。塩かあ。心知られど。とも身の
 海は恥ぢらぬ。若の友よ。別れて。さらば
 まじらん。地上。まじれ。やま。れ。老い人の
 心若木の若の枝。老い隠るや。さかさ
 さん。かぎの袖を。引き。引かれ。この
 もかのも。の陰。さる。貴賤の。花。たえ

小菰

五

地 引立テ神々ト

輿車のおかえとかがごとつれて。
 よろほひさぞらひどりりてめぐる
 盃の天も花あや酔ふるらん
 夕霞かげろふ人の面影ありと見えつ
 失にけりありと見えつ失せよけり
 不思議や今の老人のたぐ人ならず
 見えつるがごとく小塩の神代のお跡

後ニテ業平上
 声
 拍子三合

和光の影は業平の花は縁にて衆
 生依度の姿現し給ふぞと
 露もたまさかの思ひの露もたまさかの
 光を見ても花心妙ある法の道の
 べよあほも亭持と侍ち居たりあほ
 も亭持と侍ち居たり
 月やあらぬ春や音の春あらぬ我が

ト長

二

身ミぞももららのの身ミもも知チらら不フ思シ儀ギ也
かカ今イマまマでデはハ立タつツとトもモ知チららぬヌ花ハ見ミ
車クルマのノやヤとトあアらラのノ御ミ者モノ様サマのノ如イか
あアらラ事コトやヤらんげゲにニわワ及キぬヌ雲クモのノ上ウ
花ハのノ姿サマはハよヨもモ知チららじジあアりリしシ非ヒ代ダイの
物モノ緒ヲ現ア現アすスババカカりリあアりリあアらラ有ア難ナンの
御ミ事コトやヤ他タ生シのノ縁ヰがガ行ユちチもモせセでデ

○小謡

契チりリ人ヒトもモ様サマぞゾ思シひヒぞゾ出デづヅる
花ハもモ今イマ日ヒをヲあアすスのノ意イとトぞ
降フりリあアまマあアすスのノ意イとトぞ降フりリあアまマ
しシ。備ヒえエずズはハあアりリしシ。花ハとト見ミまマしシと
花ハ見ミ車クルマ。くクらラよヨりリ月ツキのノ花ハとト侍サマたタうウよヨ

拍子合ハズ
クハ上優ニ

これ春宵一刻價も金花も清香月

○サ由独吟
○切迄雜子

影惜まらばまのたこの時あり思ひ

事いそぐたはや止みぬべきわれはひ

とまき入あけれは思へども人

知れぬ心の色は枝のづから思ひ内より

言の葉の露もかじなは洩れけるぞわ

○仕舞
名中用カシ重シ
ヤ春日登の若菜のすり衣まよの乱れ

限り知らずもと詠せし陸奥の

君ぶもちずり難ゆゑ乱れんと思ひ

われあらなくはと秋みも紫の

色はほほみ香はめであり又の唐

衣着つ別れし妻もあれは遠を

来ぬる旅とぞ思ひ心の奥まで

いづの白雲のくたり月の都あれや

三番目人時ハ
めし切

小益

東山トガシこれコノもまたあづまアヅマのさそサソあ
 人の心ココロわワ野ノは今日ケノか焼ヤクま
 そ若草ワカクサの妻メもろもわワりリわワれレもま
 たタもモるル心ココロのノ大オホ息イわワ小塩コシホ又マタつツくク通トひ
 路ミチのノ行ユク方カタかカ同ト徳草トククサのノ忘ワスレれレめメわワ今イマ
 もモ名ナのノ昔コト男ヲそソとト人ヒトもモいイふフ昔コトのノ昔コトわワあア序シヨ舞マシ
 昔コトわワあア花ハナもモあアもモ月ツキもモ春ハルありアリしシ
ワカ上 用カ重シモリ
〇独吟

〇仕舞
 御幸ミヨキとト花ハナもモ忘ワスレれレ花ハナもモ忘ワスレれレぬヌ
 心ココロやヤ小塩コシホのノ山ヤマ風カゼ吹フきキ乱ミれレ教ナらラ
 せセやヤ教ナらラせセ教ナりリ迷マヨひヒ木キのノもモとト
 あアがガらラまマまマどドろロめメばバ接ツみミ結ムスぶブるル夢ユメ
 かカ現アれレかカ世ヨ人ヒト定サめメよヨ夢ユメかカ現アれレかカ世ヨ人ヒト
 定サめメよヨ寝ネてテかカ覺サめメてテ春ハルのノ夜ヨのノ
 月ツキ曙アカサキのノ花ハナにニやヤ残ノコるルらラんン。
シテ中 用カ半
地上 用カ半
〇仕舞



大正拾年九月一日印刷
同年九月五日發行

著者權限
顧慙不許

訂正著者 廿四世 觀世元滋

發行兼者 京都市上京區三條通麩屋町東北角 檜常之助

發行所 京都市神田區錦町二丁目拾番地 檜大瓜

印刷所 京都市四谷區傳馬町貳丁目 江川堂



終